

[日本の墨絵展によせて]

おがたけんざん
尾形乾山筆「春柳図」について

尾形乾山(1663~1743)は、京の高級呉服商雁金屋の尾形宗謙の三男に生まれました。尾形光琳は乾山の五才年上の次兄です。雁金屋の没落によって、光琳は絵師を、乾山は陶芸家を志します。現在では、乾山が号のように思われていますが、本来は、京の北西、乾の方角にあたる鳴滝に開いた窯の名です。実際には深省という号を多く使用しています。乾山は光琳の没後も京で作陶を続け、享保十六年(1731)頃に窯を養子の猪八に譲ります。七十才を迎えようとしていた乾山は、江戸の地に乾山焼の技術を伝えることを最後の仕事に選び、晩年を江戸で送ります。

陶芸家としては一線を退いた乾山ですが、江戸においても、創作意欲は衰えませんでした。為すべきことを為した安堵感が、乾山の心をより自由にしたのでしょう。この頃から絵画を描き始めます。老齢の乾山にとって、陶芸よりもむしろ絵画や書の方が表現手段には適していたようです。晩年の円熟した境地を写す優れた作品を残しています。元来、乾山焼は絵画や書を積極的に陶器の意匠に取り入れた高い鑑賞性に特色がありました。自ら絵付けも試みたと考えられますが、現在、京で描かれた乾山

の絵画作品は残されていません。絵師、乾山は江戸で生まれたと言えます。

大和文華館では、「春柳図」という乾山の絵画作品を所蔵しています。「京兆 紫翠深省七十七歳写」と落款が記され、元文四年(1739)の作とわかります。京の地を指す「京兆」という言葉には、王朝文化の伝統を身につけた、京の文化人の自負が感じられます。画面には水墨で柳を略画風に描き、和歌一首を添えています。この作品の両端をつないで輪にしますと、そのまま筒茶碗の意匠になりそうです。陶器の絵手本を思わせる作品です。枯れた風情のある柳には、小気味よく点描が打たれています。この点描は新芽です。柔らかい芽をふく柳は、春の訪れを告げています。ふわりと浮き上がる一枝は、暖かい春風に吹かれているのでしょうか。この枝は、また、絵から書へと鑑賞者の関心を優しく促す役割も果たしています。

乾山の自画賛作品では、絵と書が渾然一体となった深い味わいがあります。この作品でも、和歌は柳と同質の線描で書写され、やや重たい運筆は、職業的な書家や絵師にはない、ほのぼのとした情趣を伝えています。この情趣はどこ

か陶器の温かい土味に似ています。余白の効果などはあまり気に留めず、画面の上下を一杯に使って、「露けさもあかぬ 柳の朝ねかみ人にもかなや 春のおもかけ」と力強く書写しています。朝露に濡れる柳の枝を、寝乱れ髪にたとえる実に優艶な和歌です。社交的で洒落な光琳とは対照的に、乾山は内省的で実直な人柄と理解されていますが、自画賛作品には、このような趣の和歌が多く、乾山芸術に艶やかな彩りを加えています。しかし、京での乾山はむしろ陶器に漢詩を好んで書いていましたので、「春柳図」のような水墨画に和歌の賛を記すこと自体、少々意外に思われます。江戸において乾山は情豊かな和歌の世界に、より強く惹かれるようになったのでしょうか。江戸の人々が、京から来た光琳の弟に、雅な王朝文化をしのばせる作品を求めたのかもかもしれません。ともかく、その心境の変化が、乾山芸術の幅を広げ、熟成させたように思います。

乾山が『源氏物語』や定家の『拾遺愚草』の和歌を引用していることは知られていましたが、「春柳図」の和歌も乾山の自詠ではありません。この和歌は三条西実隆(1455~1537)の歌集、『雪玉集』に収められています(国歌大観番号4670)。ちなみに、『雪玉集』では「朝柳」と題されています。この作品以外にも、乾山は『雪玉集』の和歌をしばしば引用して自画賛作品を描いています。例えば、福岡市美術館に所蔵される「花籠図」(国歌大観番号

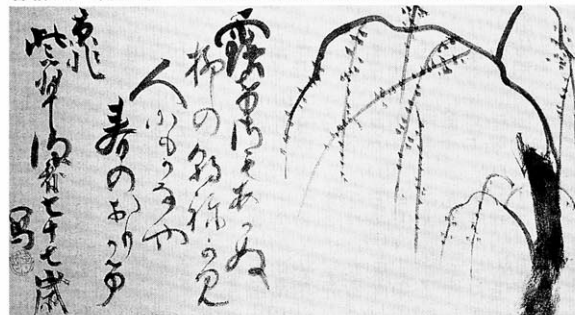
3082)や、メトロポリタン美術館の「蕩紅葉図」(国歌大観番号1447)、出光美術館のもと小襖であった四幅においても、『源氏物語』の帯木の段の和歌を書写する「撫子図」を除いて、「梅図」、「萩図」、「雪松図」の三幅の和歌は、いずれもこの歌集に収められています(国歌大観番号3961、3981、4002)。「春柳図」と同様に、これらの作品は『雪玉集』に収められた和歌のイメージをもとに、制作されたことがわかります。『雪玉集』が乾山に大きな影響を与えたことは明らかです。

ところで、乾山のかな書は、定家流とも光悦流ともつかぬ、個性的な書体と考えられています。乾山には浅からぬ漢籍の素養があり、漢字は書き慣れていたでしょうが、日常の書はともかく、作品として和歌を書写するには、かなの書体を新たに学習する必要があったと思われる。昭和十八年に審美書院から刊行された『乾山遺芳』には、『雪玉集』から瀟湘八景にちなむ和歌を抜き写した書の作品が掲載されています(国歌大観番号6338、6342~45、6347、6348)。確かに、和歌は全く乾山自身の書体で写されているように見えます。しかし、この書には三条西実隆の書に通じる特色も認められます。当然、乾山は傾倒する『雪玉集』の作者、三条西実隆の書に関心を持っていたことでしょう。乾山は三条西実隆の書の学習を通して、雅味に溢れる独特の書体にいたったのかもかもしれません。(中部義隆)

住吉神社蔵

三条西実隆筆短冊

春柳図 乾山筆 大和文華館蔵 紙本墨画 24.3×45.3cm



乾山筆 瀟湘八景和歌



同(部分)



季刊 美のたより No.112

平成7年8月24日

発行 大和文華館